

W. RAABE の „Des Reiches Krone” について

——ラーベの詩と現実の接点でゆする乙女——

川崎医科大学 ドイツ語教室

進 野 和 子

(昭和52年10月1日受理)

Über W. Raabes „Des Reiches Krone,,

——Was macht die schöne Jungfrau auf der Schwelle zwischen der Poesie und der Wirklichkeit? ——

Kazuko SHINNO

Department of Gerwamm, Kawasaki Medical School

Kurashiki 701-01, Japan

(Recived on Oct. 1. 1977).

„Des Reiches Krone”. ここにひとりの極めて美しい女をめぐる運命の展開を取り扱った小説がある。彼女は枠内小説を進展させる役になっているのであるが、ただ筋の発展の単なる動機となる以上に美しい乙女であること、即ち美の形象化されたものであることに、一個の個性をもって活動する個人と呼ばれる全体的な人間像をはるかにこえて意味がもたされている。そこで彼女の運命をたどりながら、その過程でラーベの美に対する観念 (Vorstellung) をこの小説の範囲内から考察しようと思う。その一応の結論をエロスからアガペへの屈折した移行、いいかえれば高みを求める精神的昇化と同時に深淵をのぞく深化の屈折移行として考える。しかしプラトンの美の認識と同時にラーベの内部には次のような説明がなされるほど一筋なわではいかないのであることも十分承知しておきたい。「美はここでは(筆者註 この作中では)慈愛、あるいはやさしさといったものの本質の様式であり、超自然的なもの (Übernatürliches) の内部の恩寵の純粋な賜物にあたる自然的なもの (Natürliches) 内における存在である」¹⁾という解釈がなされるほどにキリスト教と古代プラトン哲学とが不思議な混淆をなしており、端的に片付けてしまうということは困難である。この独特な難解さをドイツ人の原像 (Urbild) という点に帰着させて、E. Alker は次のように説明する。「……何かよく消化しきれないものとして、だが確かに非常に心の深い変人として代々手渡していくのが常であった。というのも利口なフランス人の数人がラーベの中に彼らには把握し難い、形をなさない、危険な、感嘆すべき、デモーニッシュな、これとは全く反対の彼らガリア人の論理性、ロマンス系人間のもつ明確な輪郭性、あるいは自明な精神の女神グラティア等を批判の基準にすえることを完全に拒否するデモーニッシュな、ドイツ人の原像 (Urbild) を見てとっているからである」²⁾と。彼、ラーベ自身も彼の内部の説明し難きものの存在を自覚し次のように慨嘆する。私の心の中にたくさんの矛盾のかたまりが突きささっている。この矛盾を彼の成長過程の中で自己のうちに成熟させていくということが彼の作家としての運命となる。この矛盾というのは互に交錯しながらも根本的に対峙する二つの性質、即ち世界に向けて信頼と確信にあふれて大胆に開け放つ期待の生の肯定と、苦渋にみちてうけとめられ、幾多の失望によって深められた、憂うつな放棄の中へ注ぎこむ世界に対する深い懐疑とが存在する。

こうしたラーベの本質を背景として、ひとりの具体的な生々しい人間というよりもむしろイデーの塊のような美しい乙女像をその Prozeß にしたがひながら解明していく操作を行なうことにしたい。

Hier gibt es eine Novelle. Das heißt „Des Reiches Krone“. Wenn man den Titel des Textes liest, dann wird man erst die Frage stellen, was die Krone bedeutet. Und dann fragt man, wo der Reich liegt. Tatsächlich ist der Reich der Heilige Römische Reich und die Krone ist....

Die Krone ist ein Symbol, das fast leitmotivisch das Geschehen des Werks auf die Mitte des Sinns hin sammelt. Hier wird die Erklärung des Symbols verlassen, auf das vielleicht die Gestaltung von Raabe in dieser Novelle zentriert ist. Doch wird das Symbol irgendwo eine Deutung treffen, wenn die Beziehung zwischen einer schönen Jungfrau und der Krone erklärt wird. Dabei möchten wir die Rolle und Bedeutung der schönen Jungfrau in dieser Novelle durch die Betrachtung über Raabes Vorstellung des Schönen deutlich machen. Wir halten die Bedeutung für eine Brücke zwischen dem Eros und dem Agape, zwischen der Wirklichkeit und der Poesie. Die Rolle läßt sich uns vermuten, daß sie, die schöne Jungfrau, dem Schönen eine Gestalt überzeugend gibt. Dennoch müssen wir immer wieder daran denken, daß Raabe die schöne Jungfrau nicht für einen Menschen hielt, sondern vielmehr für die Auszeichnung des metaphysischen Attributes der Schönheit.

„Des Reiches Krone” (帝国の冠) に登場する乙女はラーベが好む乙女像のひとつである。(たとえば „Im Siegeskranze” における Ludwicke あるいは „Else von der Tanne” の Else といった。) しかしこの „Des Reiches Krone” の乙女, Mechtild は彼女らと少しばかり異なるのであるけれども、ここではそれを詳述するゆとりがない。Mechtild Grosse は美しい、帝国自由都市ニュールンベルクの都市貴族の娘である。彼女の本質についてはここではこれ以上立入らずに一旦中断してこの小説の全体を概観することにした。

作品全体の構成は、いわゆる枠小説の形式で、ラーベの最も得意とする方法である。この手法はその時点にある実在感を与えつつ、その層を重ねることによって、そう大きくはない Erzählung 内で取り扱いうる時間的空間を拡大することができる。殊にラーベの場合、枠構造は単純な枠組ではなく、たたみこまれた時間の層を語り手が自由に入出入りし、枠内で進行する物語を随所で中断し、単なる Geschichte の報告であることを避けます。そのねらいはテーマの深化と高い象徴性へ導く効果にある。象徴性、それは作品になんらかの時間の制約を越える普遍性をもたらすことでもあります。ラーベの枠小説の特質について語ることは目的ではありませんが、この Aufsatz の論旨にもどこかで邂逅することでありましょうから軽く触れることにいたしました。

この小説が „Des Reiches Krone” というタイトルを得て世に出る初めての体裁を整えたのは1870年の春である。(H. Pongs は4月と記録しているが、ラーベの日記に依拠する K. Hoppe らは5月5日とする。H. Pongs が何に基いて4月としているのか現在の手持の資料

では明らかにすることができません。) ³⁾ 1870年7月4日に一応作品は完成され、9月12日と22日に校正を行なった記録が残されています。やがてこの作品が初めて世に出ることになる雑誌『Über Land und Meer』の10月号誌上には、普仏戦争(1870年7月19日～71年まで)の7・8月戦闘の記事であふれているというありさまでした。ドイツはこの普仏戦争終結直前、ヴェルサイユでプロシアを中心とする小ドイツ方式で第二ドイツ帝国の成立を宣言する。史実の上で、帝国・Reich が誕生するそのとき、ラーベはひとりの語り手を通じて „Des Reiches Krone” を書いたということは、世間に対し孤立し魂の人であるかのような印象の強いラーベが、その反対に最も目覚めて世界を眺めていたことの確かな証拠でもあります。こうした現実の世の動きを見ながら、ラーベは1453年東ローマ帝国が滅びの危機に直面したとき、コンスタンティノープル陥落のニュースが伝わり、騒然とし、浮足立つ町の喧噪を脇に、人生の平安を会得した教養ある老人の手に物語をまかせます。その語り手が繰り出す枠内の小説は神聖ローマ帝国の冠が危機に瀕した事件、フス戦争の事件に関連する一市民の出来事である。

フランスとの緊張が高まるドイツの現状の中に身を置くラーベと、キリスト教国・東ローマ帝国の滅亡が必至となり、異教徒の侵略に一国が崩壊していく時点に身を置く語り手とのそれはあまりに酷似している。ラーベはこの小説の終りを「ドイツ帝国の冠はまだニュールンベルクにある。——しかし誰が一体この世界で再びそれに榮譽をもたらすことになるのだろうか？」⁴⁾ という言葉で結ぶ。第二次大戦後の今日も、そしてまたラーベがこの小説を書いている当時さえも、帝国の冠は既にウィーンにおかれていたのである。こうしてタイトルの「帝国」は外的事実の上からも二重・三重の意味をもつのだが、しかしこの帝国の意味を文字通り、表面のみで理解することはラーベを皮相な愛国者に仕立てあげてしまう。そのあやまちを我々は既に第二次大戦時のドイツに見ることができるのだが、その傾向のはしりを既に1930年の、ラーベ生誕百年記念論文⁵⁾ にかがうことができる。脇道にそれすぎるが、仮にラーベが存命し、上記の氏のような彼の作品の利用に遭遇したとすれば、彼自身当惑をおぼえたであらうでしょう。そうした騒がしさというものは彼・ラーベの望むところではなかったのですから。ラーベは „Des Reiches Krone” の中でそうした熱狂した世の姿というものに対し、以下に述べるような批判的な態度を示している。

作中の語り手はニュールンベルク市の中心教会、聖セバルト教会の庭で、熱心な修道僧 Johannes Kapitranus が石の説教壇から、火のようにもえて、贖罪を説く。その呼びかけに応じて市民たちは生活のぜいたく品、遊戯類、その他金ピカものをもって潮のように教会に押し寄せ、それらを中庭の火に投じる。修道僧は、異教徒の勝利、東ローマ帝国の破滅について、反キリスト教徒の侵略と世界の滅亡について説教する。彼の説教と贖罪の呼びかけは、彼が進む地、至る所でくり返される。その混乱を語り手は「そうして今日ニュールンベルクでもそれが行われている。100倍もの自分自身のおごり高ぶりを脱ぎ捨てる、だがやがてこの世の思いあがりやと享樂の中に明日はまた逆戻りする。昨日そうであり、今日そうであるように。⁶⁾」
『私は命の声です、私はあなた方に呼びかける、祈れ、来たれ！』⁷⁾ と刻まれた聖セバルト教

会の鐘が鳴り響くが、それをも圧倒して説教僧は語る。だが一方語り手はいう。「これ以前に私に語りかけたあの穏やかな声を凌駕し、打消そうとするなら、彼(筆者註 修道僧 Johannes Kapitranus)はいったいどんな舌で語ればよいのだろうか?!」⁸⁾「穏やかな声」というのは、あのアウグスティヌスが『告白録』の中で語っている、彼を完全なる回心に向わしめた Tolle, lege! というあの不思議な声のことである(註参照9)。ラーベは『告白録』のこの場面を引用し、それにすぐ続けて、「そうだ、これがそれなのだ! 私もまた大きな恩寵によって、神の慈悲によって半ば子供のような、半ば主の御使いのような歌う声を確かに聞き分けたのだ。そして混乱した世が私にその意味を示し、私に平安を与えるその言葉を発見させたのだ」¹⁰⁾と語り手に告白させる。ラーベにとって騒ぎ立つ、混乱した世の絶叫はむしろ彼の魂の深い部分への注視にと心を向わせるのである。外的な諸力以上に、人間の存在を保証するものは人間の心の奥底にあるおだやかな声、存在の本質を規定するもの、魂の底でつなぎとめるものであった。ラーベはキリスト教、汎神論的なギリシア・ストア哲学、そしてフィヒテに始まりヘーゲルに至るまでの19世紀前半期の観念論の世界とかけぬけながら、やがてこの観念論に対する懐疑からショーパンハウエルへと接近し、更に時代を生き抜くことによって、彼が取捨撰択する過程で作用した彼生来の根本感情を土台に培われた覚めた意識は、もはやそうしたうわべの世界に酔うことを許さなくなっていた。作品後半ラーベはまたも粹内小説を中断して、「もしあの大胆で、火のようなフランシスコ修道僧があそこで、いまこのこの私のペンから白い紙の上に注ぐ黒インクの一滴ほどの重さで語るならば、この同じ空気もどのように震動したことでしょうか?」¹¹⁾と、「どの舌」の解答を出すと共に、自分の態度への自信と確信にみちて語ります。この落ち着きを奪い、ただ人々を盲のままにあおり立てていくことへの痛烈な批判は決して彼が皮相浅薄な愛国者ではなかったことを立証することでありましょう。

さて帝国、目に見える事象としての帝国及びそれに対するラーベの態度についてはすでに語ったが、帝国の冠ということになると、これはただひとつ神聖ローマ帝国の冠を指すものではない。確かに主要人物たちはこの帝国の冠の救出と、本来あるべき地ニュールンベルクへの返還事件に関係する。しかし、本当の意味での帝国の冠の意味は冒頭で述べた乙女、Mechtildの運命が解き明かすこととなります。

ラーベは1864年11月11日の段階で備忘録に「美しい少女にキッスをした癲病の男の話。それがもて彼女は彼の悲惨な世界へひきづりこまれる。詩にすること」と記されている。この時から作品として日の目をみるまで6年間あるのだが、その間いづれも実を結ぶことのないまま、心に浮かんだ思いつき程度の記録に止まっている。しかし、一冊のニュールンベルクの年代記¹²⁾を入手するにおよんで、構想は一気にまとまった形をとります。ラーベがこの年代記をどのように彼の構想の中で組み立てていったかは W. Fehse が詳述いたしておりますので、この年代記の記録に作品中のニュールンベルク市に関する事件はことごとくそのモチーフを得ているということのみ述べるにとどめます。むしろ具体的な構想の段階で着想の時とは丁度逆の関係にもちこまれている筋立に注意を集めたい。新しい構想においては美しい乙女は積極

的に彼の苦悩の世界へ身を投じていき、その悲惨な運命を共にすることを喜びとし、彼女自らその頬におかされた顔にキッスをする。

語り手の Ich-Erzählung の形式で統一された小説の枠内小説中に「百の枝をしげらせる丈夫な木にさえ、Mechtild Grosse ほどに美しい花は咲かなかった」¹³⁾と回顧の世界にまずその乙女は登場します。彼女の美しさは幾度となくくり返し強調され、彼女がラーベの美の観念を作品中に形象化していかなければならぬことがまず印象づけられます。ラーベにとって美しさというのは、その容姿・外観の優位性を意味するにとどまらず、むしろほんのひとまたぎでメタフィージッシュな世界へ移行するというひとつのサイン、符号である。この符号は最後の Mechtild が名門の一族を捨て、健康者の世界に対抗して彼女自身の Existenz へ身を投げ出す、その瞬間をちとるまでの符号である。しばらく作品にそくして眺めてみよう。

彼女が後にキッスすることになる男 Michel は語り手の家庭に赤児の頃から養われている身寄りのない郷士の息子である。彼ら二人は大学へ進む前の準備段階の授業に亡命ギリシヤ人からギリシヤ語を教わりながら、木陰のテーブルに腰を据えている。そこへ五つ・六つの Mechtild が庭の境の垣根をくぐってやってくる。このオチャメなチビさんを Michel はひざに抱いて陽気に言う。「いい子ちゃん、彼らのことを笑っておやり、このむっつりしたおばかさん達を。——笑い、大きくなり、そして僕をお待ち。——僕達二人でいつかこのむしゃくしゃする世間に、大胆な度胸と陽気な心をもつ者のみが最後の審判の前日に花の冠とやらをかすめて手にするだろうっていうことをおしえてあげようよ！」¹⁴⁾恐らくこの場面は結末に対してかなり重要な暗示を、しかも明暗のコントラストのうちに終る結末を暗示する。この箇所ですべて「冠」がもうひとつの意味をもつものとして始めて提示される。「最後の審判の前日」もやがて判明するが本来の意味以上の具体的事実をも暗示する。そして事件の結末はこの予言通り、二人は「冠」を手にいれる。しかしそれは彼らが予想もしなかった形と重みで彼らに与えられる。少し先走りし過ぎたようであるが、何かしら「冠」と名の付くものが彼ら二人の運命にかかわるらしいことがここで明らかにされているのである。

やがて Mechtild が美しい乙女と成長したころ、神聖ローマ帝国の冠はフス派とタボール派の武装蜂起によって奪取の危機にさらされる。このとき、ニュールンベルクではこの帝国の冠を敵の手から救出すべく、十字軍の召喚が叫ばれていた。だがこの二人の青年はかつて大学へ行く以前のように、老いたギリシヤ人教師を相手にギリシヤの詩を木陰のテーブルに向い、嗜んでいるのである。その時若い乙女となった Mechtild はかつてと同様やってくるのだが、しかし今は義憤にもえ、この三人の安穩さを責め、帝国の冠の救出をせまる。その真実さはトルコによって侵略されたとき、彼らの祖国に対してなすべきこともなさずただ彼らの言葉が与えた文化遺産をのみたずさえて亡命してきたギリシヤ人高師の血を吐くような、苦渋にみちた痛悔の感情を呼びさまし、その彼の吐く告白がいよいよ二人の青年の心を帝国の冠のために闘うことを固めさせる。この Mechtild の姿にラーベの美に対する態度を窺うことができます。ラーベの美に関する考えの基底をなすひとつでもあるのですが、美とは個人的、遺伝的に継承

するものでも、自己の目的として賦与されているものでもなく、世界全体と切り離し難く絡み合い、おかれた状況への配慮と責任をになわされたものであること、即ち美という Geist のもとで混沌をきわめる世界に輪郭を与え、形をとるよう要請しうる権利をもっているという立場、プラトンの美の見解に立ちます。こうした美のもつ要請権を我々は „Else von der Tanne”,あるいは „Im Siegeskranze” 等の女主人公の属性の中に発見するのであるけれども、それらの主人公達と同様、Mechtild もその美に課せられた任務を果たします。ラーベは「こうして騎士 Michel と私は戦へと帝国の冠のために勝ちとられたのでした」¹⁵⁾ と語り手を通じて美の勝利を暗示します。

一国の冠がひとりの娘によってその救出が求められる一方、Michel は Mechtild に無事帝国の冠が救出されたそのときには二人にこの上もない幸せが保証されるはずだとささやいて出発していくのですが、この段階から帝国の冠は個人の運命にかかわるものとして存在し始め、無関係に無機的に静止した状態から離れ、いま一步生あるもの、何かしら人格的なものへと踏み出していきます。即ちラーベの意識の中で帝国の冠が新しい段階へ入ったことを示していると考えられます。この傾向は中世の王や聖物に対する中世の民間信仰の素朴な行為の伝統をもちこんでくることによって更に一段と強調されます。

帝国の冠というものは皇帝の輝かしい栄光のシンボルであると同時にその全能全権のシンボルでもありました。それ故この全能は破壊と苦悩、いいかえれば一国の歴史であれ、個人の存在であれ、区別なくそこに損傷が生じたときにはそれを癒すこともできるという信仰があった。この信仰に依拠して Mechtild は一行がニュールンベルクへ帰還したとき、Michel のみ難をのがれるために帝冠を引き続きハンガリーへ運ぶ護衛の任務につき、一行より帰還が遅れたとき、Michel が全能の帝冠の前で彼女との結婚を誓ったということを聞かされただけで何の疑いもなくその約束の成就をただ確信し、また帝冠がニュールンベルクへ帰ってきたとき、全ての病人たち、心に病を負う者も、市の避病院の癩病患者たちさえも、その全能の治癒力を期待して祝典の行列に参加することが公然と許される。それはひたすらなる純粋な信頼の行為である。この人々の密度の濃い行為は社会に秩序を与え、差配する権限の権標としての帝冠から、いいかえれば他に対する要請・命令の権能から要請されるものへの移行、即ち世の苦悩・病・その他諸々の弱さ・損傷を身に引き受けねばならぬ義務と責任の像が表面に浮かびでてくる。この帝冠の属性は美のそれを想起させ、そしていまや帝冠と美しい乙女の像とがその質の部分で重なりあってきたといえよう。作品中ではこの出来事以前に、包囲を突破し、最初に救出したものの特権として帝冠と帝国の権標である聖遺物をおさめた教会に入ることが許された Michel が、その帝冠の前で大胆にも語り手である友人に帝国の真の冠が彼の手に与えられたことを祝してほしいとささやく。真の冠 Mechtild と帝冠との同一視が既に準備されていることも付け加えておこう。ニュールンベルクへの帝冠の帰還は小説の大詰めであるが、Michel が Mechtild を帝国の真の冠と呼んだそのことはやがて判明する Mechtild の運命の反転が帝冠のその全能ゆえに引き受けた責任行為とも一致する。

ニュールンベルクへ冠が帰ってくることは彼女が待つ Michel の帰還を意味する。だが、Michel はそれ以前既に癩におかされ、ニュールンベルク市の慈善施設、隔離療養所に身を寄せていた。彼は自分の帰還と身に起こった事実をただひとり語り手である友人だけに知らせる。語り手が「癩病の母」に呼びだされて、この隔離療養所の門の前へ行ったとき、この世とこの世ならぬ場所との境界に、近寄るものすべてをおどすように突きたてられた剣が、何も語らずただ僧帽を深々とおろしてカプチン派の僧衣に身を包んだ手が指さした一本の剣がことの真相を全て語った。境界に突きたてられた剣は Michel のこの世に対する彼の態度表明である。「癩病の母」というのはニュールンベルク年代記に伝えられているところによると市の慈善施設には代々年輩の都市貴族の婦人が献身し、その行為の気高さのゆえに人々は Mater Leprosum と称して敬意を示したとある。

さて、美しい乙女はこの事実を帝冠の到着の前日にきかされる。帝冠が市の「聖なる御霊の教会」に到着したとき、癩病の母が人混みをかきわけてひとりのすっぽりと全身をおおいかけた男に聖櫃までの道をつけてやっていた。その時、段上の、その一隅にのみ残る夕陽の中から一人の娘がその男めざしてかけおりにいく。親族が引きとめる声も、おどろき行く手をさえぎろうと身を投げ出す老いた癩病の母の制止もむなしく、健康者をふりすて病める者たちの世界へとびこむ。健康者たちが押し返され、避病院の患者たちが押し寄せ、そのせめぎ合う両者の間に深い沈黙がおとずれ、そのとき乙女はこの癩病の男を抱きとる、勝ちとるのである。こうして帝国のほんとうの冠は勝ちとり勝ちとられる。「最後の審判の前日の花の冠」の予言は成就する。彼女は前日真相を知らされたとき既にかすめとられていたのだった。Michel の両脚がもはや「このあわれな病人を苦悩の中に、同時にいい尽せぬしあわせの中に」¹⁶⁾ (下線筆者) 支えていることができなくなったとき、「彼は婚約者の光輝く姿の中に」¹⁷⁾ (下線筆者) 倒れこんでいく。この瞬間突如全ての患者たちは「主よ、あわれみたまえ！」と歌いだし、一方その同じ瞬間に「聖なる御霊の教会」の中から「いと高きにます主に栄光あれ！」という歌声が流れだし、聖櫃は教会の階段を登り始める。

Michel がかつて彼のエロスの世界から単なる形容として Mechtild を帝国の真の冠と呼んだものが全く新しい意味をもって響き始める。Mechtild は帝国の冠が人々の苦悩を引き受けたように、Michel の苦悩の世界を引き受けます。彼女は Michel 達癩病者の渦の中に身を投じ、二度と再び市門の内で以前の彼女を見かけることはなくなる、ただ癩病の母の介添えとして誇らしく歩く姿を見かけることになるばかりである。やがて彼女自身が癩病の母のあとをつぎ、帝国の冠とさえ名付ける人々が出てきます。ラーベはそんな彼女を、彼女の耳にその言葉は恐らく達しなかったであろうし、よしんばそうであっても彼女自身の心にくらべれば何ほどの意味ももたなかったことであつたらうと語ります。

ここに至ってラーベは完全に帝国の冠と Mechtild とを同じ名前呼びますが、その過程で美は美しい乙女はいったいどのような変質をとげたのでしょうか。J. Kunz は「エロスの愛の成就と同時にそれと同等の強烈さによるアガペの愛の完成、即ち苦悩の受諾、またこの世の

苦悩の中を進み抜く覚悟としてのアガペの愛の完成」¹⁸⁾として解釈し、そのアガペの愛の形象化と説明します。

乙女が行為を選び取った瞬間エロスからアガペへの移転が行われたわけですが、それをラーベは苦悩といい尽せぬしあわせ(エロス)の中に立ちおおせなかった Michel が婚約者(エロス)の光輝く姿(アガペ)の中に抱き取られたとき、病める者からは救いの祈りの歌が(Michel+エロス)と同時に教会からは主の御業を讃美する歌(Mechtild+アガペ)が流れだしたと描きわけます。

ただししかしここにプラトンのエロスとアガペ以外のもの、即ちキリスト教的アガペの介入を見ます。この介入によってアガペはいまひとつの屈折を得ます。キリスト教の響きは既に随所に鳴り始めていたのですが、ここでは割愛いたします。

ひとりの女性を通じてエロスとアガペの統合が完成するのですが、しかし久しい以前から文学にとってこの統合はもはや困難なことになっています、時には絶望の海に漂いながら、果てしない Prozeß(過程)をくり返し、その Prozeßを描くことしか許されなくなった文学状況、終りなく、癒され閉ざされることのない傷口をさらしながら存在する文学、実存主義の文学というレッテルを貼られた文学作品の出現以来。(カフカの「Der Prozeß」日本訳名「審判」；カミュの「シジフォスの神話」等々)。この作品がラーベ自身の内部にあって、確かに懐疑の霧にとざされる時期があり、彼自身の Existenz が危機に頻すこともありましたがその暗い時期と呼ばれている時期をめぐり抜けたほぼ直後にかかれた作品であったことを思うとき、J. Kuuz の次の指摘を思い出すにはいられません。彼自身の論文をこのことばでしめくくっているのですが、「語るという行為が不安や疑いをのりこえる希望の勝利の自覚化の中に集約していく。私は Wilhelm Raabe という詩人の偉大さはそこにあるということを確認します。」¹⁹⁾この自覚化の性向は粹小説の中でたびたび粹内小説の歩みをとめて粹組みを司る語り手の省察が加わってくるラーベの文学の特徴の中にもよく窺えます。この書く行為の中で自己を形成していくことこそラーベの特質であったわけですが、彼はこの作品とほぼ同時期の作品によって、それは古代ギリシアの海洋の魔神プロテウスにヒントを得た Novelle ですが、この魔神の本性を、常に自ら変転してやまず、その変転の過程で自己を更新していく生のシンボルとして、把握することによって、ショーペンハウアーの深い懐疑のしがらみから脱け出します。プロテウスがひとつのメタフィジックなモメントであったように、„Des Reiches Krone”では美しい乙女という美がモメントとなってエロスからアガペへ、更に言えばドイツの現状から詩の世界へとラーベをいざないられ、リアリストとしてのラーベとの間にある内部分裂の敷居にたって常に刺激し続けていた美しい乙女の像に着目いたしました。

註

- 1) Arenhoevel, OTTO : Des Reiches Krone.—In: Mitt. d. Raabe-Ges., Jg. 39, Braunschweig 1951, S. 73

- 2) Alker, ERNST : Die deutsche Literatur Im 19. Jahrhundert 1832-1914 Kröner Stuttgart 1969 S. 472.
- 3) Pongs, HEREANN : Wilhelm Raabe — Leben und Werke — Quelle & Meyer. Heideberg 1958. S. 290.
- 4) Raabe, WILHELM : Wilhelm Raabe SÄMTLICHE WERKE Bd. 9 Zweiter Teil, Vandenhoeck & Ruprecht. Göttingen 1976 S. 378.
- 5) Suchel, ADOLF : Wilhelm Raabe ans Anlaß der 100. Wiederkehr seines Geburtstages der deutschen Jugend dargestellt. Hermann Klemm U.=G. Berlin=Grunewald. Leipzig. 1931
- 6) Raabe, WILHELM : Wilhelm Raabe SÄMTLICHE WERKE. Bd. 9 2. T. Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen 1976. S. 325.
- 7) a. a. O., S. 325.
- 8) a. a. O., S. 325.
- 9) a. a. O., S. 324. ラーベはアウグスティヌスの告白を次のように引用する。見よ、そのとき私は隣の家から少年か少女か分かりませんが、歌うような調子でくり返しくり返し、「とれ、読め、とれ、読め！」という声を聞いたのです。途端に血の気が私からさっと失せ、私はこの文句が子供の遊戯歌の中のものであったのだろうかと一心に考えてみました。けれどもどこかでそんな歌を聞いたおぼえは全然ないのです。私はどっとあふれる涙をおさえてたちあがりました。そしてそれが神の声だと知ったのでした！
- 10) a. a. O., S. 324.
- 11) a. a. O., S. 363.
- 12) J. H. von Flackenstein (1682-1760) : Johanius ab Indagine wahre und Grund haltende Beschreibung der heutiges Tages weltberühmten des Heiligen Römischen Reichs Freyen Stadt Nürnberg, in fünf Büchern abgefasset ; Erfurt 1750. Druck und Verlag Heinrich Nonnens 詳しくは、上記全集本の9巻第2部, 489頁, Des Reiches Krone 1. Zur Entstehung を参照。
- 13) Wilhelm Raabe : a. a. O., S. 328.
- 14) a. a. O., S. 336.
- 15) a. a. O., S. 343.
- 16) a. a. O., S. 374.
- 17) a. a. O., S. 374.
- 18) Kunz, JOSEF : Wilhelm Raabes Novelle „Des Reiches Krone”. Versuch einer Interpretation. — In : Jahrbuch d. Raabe-Ges., Braunschweig 1966, S. 15.

引用文献外の必要限参考文献

- 1) Fehse, WILHELM : Aus Wilhelm Raabes Dichterwerkstatt. Des Reiches Krone. — In : Wilhelm-Raabe-Kalender 1914, Berlin: Grote 1913, S. 97-113.
- 2) Hoppe, KARL : Wilhelm Raabe —Die Lebensidee Raabes— Vortrag, gehalten auf der Hauptversammlung der Raabe-Gesellschaft in Düsseldorf am 16. September 1956. Vandehoeck & Ruprecht Göttingen 1967.